

1 出典(【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】ともに):西谷修『私たちはどんな世界を生活しているか』  
問一 三行記述問題です。傍線部(1)から、「天皇」が「それまで宙吊りの権威にされていた」という内容を言い換えて説明する問題です。ここは政治権力のことなので、【文章Ⅰ】第5・6・7段落内に書かれている、権力を維持する正統性についての説明が要求されています。第7段落から、「江戸時代まで天皇は実際の統治には関与しておらず」、「権威としては京都の簾の内であまり形骸化していた」、「徳川将軍を誰が承認するのか」、「形式的にでも帝によって」、「征夷大將軍に任命される」、「それによって、(将軍が)この国の統治を任される」、「(それが)幕府の正統性の論理」、という流れを読み取り、三行以内で記述します。

問二 選択肢問題です。傍線部(2)の説明を言い換えたものを一つ選びます。「近代国家」、「それぞれの国は対外的には主権の相互承認秩序に従い」の内容に対応するのは、【文章Ⅰ】第9段落の、「主権国家」を説明している箇所になります。正解はウです。ア「…フィクションを構築する。」、イ「市場を舞台として展開される相互交渉」、エ「…挿入されるフィクションを前提とする。」がそれぞれ誤りです。

問三 選択肢問題です。傍線部(3)から、翻訳された「社会」という語が、そのまま西洋語の「society」を写せるわけではない理由説明を一つ選びます。【文章Ⅱ】第3・4段落の内容を中心に考えて、正解はエになります。翻訳語の「社会」は、対応する「society」の語をラテン語にまでさかのぼって考えたり、関連語の「individual」や「contact」と一緒に考えたりすることはできないのです。ア「学問として成り立たせるしかなかった」、イ「…それらの影響により『世の中』という理解をベースにして」、ウ「…素養のあった人たちは、…結び付けて考えることはできなかった」がそれぞれ誤りです。

問四 三行記述問題です。傍線部(4)から、西洋の文物をすべて「国語」という日本語に取り込んで理解することができるのは、どういうことによってか、を記述します。  
【文章Ⅱ】第1段落、「(西洋由来の)それまでの日本語にない言葉を、漢字二字を組み合わせて何とか対応する日本語(=翻訳語)をつくる」、「その造語が」、「学校教育が始まったので、そこで教えることで日本の通常語の中に入れてゆく」、これら一連の内容を記述します。

問五 三行記述問題です。傍線部(5)から、日本が西洋の文物を翻訳語で取り込むことができた理由を説明します。【文章Ⅱ】の第11段落、第12段落、第14段落、第15段落の内容をまとめて書きます。11段落「日本の場合は早くから中国から漢字が入って」、「その漢字を通して中国を知ると同時に、それを自分たち流に活用して記録を残すこ

とまでしていた」、12 段落「他者を他者として認知し、把握しようという姿勢」、14 段落「自分たちの間で共有する」、15 段落「理解共有しようとする意識があった」のそれぞれの表現に着目して、全体をまとめます。日本は以前から中国を「他者」として理解してきたので、西洋の文物も同様に「他者」として理解共有しようとする意識があったことを記述します。

問六 接続語問題です。選択肢の四つの語が必ず一つずつ対応します。A は比較・選択の「あるいは」、B は順接の「だから」、C は逆接の「ところが」、D は添加の「それに」がそれぞれ入ります。

問七 漢字問題です。ア「君臨」、イ「根幹」、ウ「改造」、エ「公用」、オ「新天地」です。楷書で丁寧に書く練習を日頃からしておきましょう。

問八 【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】に関する話し合い問題です。本文の内容を正しく理解していないのは B さん、つまり正解はイになります。本文は「日本が急激に近代化し、やがて戦争に敗れていく背景」と「江戸時代の医学事情」を結び付けてはいません。アは「戦争」という翻訳語が近代の国家間秩序の中に組み込まれた中での「戦(いくさ)」であることを言い当てており、優れた意見です。「日清戦争」は日本と清(中国)との、「日露戦争」は日本とロシアとの、国家間の戦いです。それまでの日本の「戦(いくさ)」は国内の中央政府(朝廷や幕府)との関係によって「～の乱」「～の役」「～の変」などと呼んでいました。「西南戦争」は、かつて「西南の役」と言われていました。ウは、種子島にポルトガル人が来た時の日本の受け止め方を言い当てており、第 12 段落に対応しています。日本人は鉄砲を解体して分析し、今度は自分たちの手で製造するようになります。エは、第 15 段落の内容に対応しており、本文の内容に合致しています。

2 出典：青山美智子『月の立つ林で』

問一 語句問題です。(一) 本文「I 信 I 疑ですぐには喜べなかった。」とあるので、正解は半信半疑です。(二) 「II ですが、…」とあり、「あってもしかたがないものや、よけいなつけ足し」という意味の言葉なので、蛇足(だそく)が入ります。(三) 「III をひそめた。」は、「いやそうな顔をした。」という意味の言葉なので、「眉(まゆ)をひそめた」が入ります。

問二 三行記述問題です。傍線部(1)から、「タケトリ・オキナ」が言った直前の箇所をまとめれば正解です。47～55 行目までの内容から「月から見る地球は、…かなりの大きさで見ることができる」、「青々として」、「たとえようなない美しさ」、「ポジティブなイメージしか抱かない」、を取り出し、57～60 行目までの、「遠く離れているから、…よい想像だけで夢見ることができる」、の内容を逆接で結び付けて記述します。

問三 語句問題です。傍線部 a「屈託なく」、b「取り繕った」のそれぞれ意味を問う選択肢問題です。a「屈託なく」は「気にかかることが何一つなく」という意味です。ここではイが正解です。B「取り繕った」は「外見だけ飾って体裁を保った、その場だけなんとかごまかした」という意味です。正解はアです。

問四 三行問題です。傍線部(2)から、このときの「私」(＝「睦子」)の心情を読み取って記述します。「篠宮さん」との話から「リリカさん」という有名な作家の切り絵アートの話になり、「(リリカさんと)少しでもお話しできたら、minaさんの本の参考になるかもしれないです」と言ってもらえた「睦子」は心を躍らせています。「リリカさんの美しい切り絵アートに感動したこと」、「篠宮さんから、本人(リリカさん)に会って直接話ができれば本の参考になると言われた」、「自分の本の出版企画がリアルに感じられた」、「出版社を出てからも、それは私を高揚させ続けた」という四つをまとめて記述します。

問五 三行記述問題です。傍線部(3)から、「睦子」が「みっともない」と自己嫌悪に陥る場面で、その理由を説明する問題です。設問では「どういうことが『みっともない』のですか。」とあるので、文末は「…こと。」とします。「睦子」は自分の本が出ることを、作品が売れることとは違う喜び、つまり自分自身が直接認められることへの喜びとして感じています。けれども、夫の剛志は少し驚くだけでそれ以上のコメントはなく、むしろ「いいかげん働きすぎじゃない」(154行目)と言います。そこから口論が始まります(155～168行目の内容)。そして169～171行目「すごいことなのよ、と…謙虚になることができるのに。」という自己嫌悪に陥る「睦子」の内面描写が出てきます。これら一連の「睦子」の言動が「みっともない自分」です。従って、「本の出版を喜んでほしい」、「剛志はそれを喜んでくれず、働き過ぎて体を壊さないかと心配するばかり」、「不満を感じながら、自分のように認めてもらえるアクセサリー作家は本当にすごいのだと自慢してしまった」、といった内容を記述できればよいでしょう。

問六 「睦子」の心情を問う選択肢問題です。傍線部(4)の少し前の表現、182行目「月から見える地球はさぞかし美しいだろう」、185行目「でも実際には、この地球はどこもかしこも汚れて破壊されている」、188行目「遠いから、知らないから、きれいなことしか想像しないですむ」、の内容を取り出します。その上で傍線部(4)の「その夢を人々にささげよう。」を見ると、「その夢」は「美しい地球」に対応します。従って、「睦子」は「実際」より「夢」を選択しようとしているのが読み取れます。正解はイです。ア「…夫がいる生活…世の中を生きる上では不必要…」、ウ「理想的な夫婦関係を演じるだけだ」、エ「自分のアクセサリー作品が人々から愛されなくなったとしても」、がそれぞれ誤りです。

問七 空欄補充問題です。傍線部(4)(問六)とも関係があります。「睦子」は「美しい世界」を人々に提供したいと考えています。そして空欄(5)の前後は、「篠宮さんの言う、(5)を。」とあるので、〈篠宮さんの言葉・「美しい世界」・「睦子」の憧れる世界〉これらを総合して考え、設問要求に沿って本文から八字の表現を抜き出します。すると、104行目～105行目の「非現実的なページ」が導き出されます。

問八 擬音語・擬態語等の語句問題です。(一) A は、「グーグル・ポッドキャスト」の番組を視聴しながら何か関心のあるものはないかとなんとなくパソコンと向き合っている場面なので、ウ「ゆるゆると」が入ります。(二) B は「ぺこぺこ頭を下げている。」、C は「いつまでもぐずぐずと文句を言っていた。」、D は「涙がはらはらと落ちてきて…」、となります。

問九 本文の特徴や表現に関する問題です。正解はエです。美しい地球の「裏の部分」とは、ここでは「実際には、どこもかしこも汚れて破壊されている。」ということです。そしてこれは「睦子」の、華々しいアートの世界に入れる喜びとは裏腹に、普段の日常では夫との重苦しい生活が続いていることに対応しています。ア「その後のプロセスがスムーズに運ばれていく」、イ「アクセサリ作りがあまりはかどっていない」、が誤りです。ウは、「せっぱ詰まってお互いに感情的になってしまう」が誤りです。ここは「お互いに」ではありません。「剛志」は感情的になっていません。むしろなだめています。

問十 内容一致問題です。正解はアです。138行目に対応しています。イは誤りです。「睦子」が久しぶりに手の込んだ煮込み料理を作ったのは、136行目「自分への祝いのつもり」です。ウも誤りです。「剛志」が興味を示したので、畳みかけるように語ったわけではありません。エも誤りです。「謙虚になることができるのに」(171行目)の部分は、「睦子」の内面なので、夫に言葉で伝えたわけではありません。実際には「睦子」はむしろ黙ってしまい、「アトリエに行くわ」と言います。